

関のナイフ業界の現状

この2年ぐらいはコロナでアメリカへ行けてませんが、海外の刃物市場はこの10年で大きく変わって、アウトドア用のナイフ（ポケットナイフ、ハンティングナイフ）のOEMブランド（Spyderco, SOG, Browning, Cold Steel,）の殆どが台湾と中国にシフトして、今残っているのは G.サカイさんが作っている Spyderco だけになってしまった。

今までは量産の低級品は中国、中級品は台湾、高級品は日本とすみ分けが出来ていたのが、中国、台湾の品質が上がって来て価格も安いのでもう日本は必要なくなったのが原因で、特に中国はチタン、カーボンファイバーなどのハイテクな素材が安いのと NC やレーザーなどの機械化で精密加工が出来るようになり、今流行のタクテカルナイフのライナーロックやフリッパーのフォールディングナイフは精密度が必要なので、関でも出来ないような製品を精密機械加工でオリジナルなデザインと自社ブランドでアメリカのショーに展示して自社販売網を築いて存在感を増している。もう昔のコピー製品を大量に安く作るイメージから脱却している。品質が良くなったのでアメリカの老舗メーカーの Buck や Gerber も中国で作っている。今までの関の職人の技術を精密機械加工で仕上げ、よい製品を作っている。

このような状況の変化で関のアウトドアナイフのメーカーは衰退して今では3-4軒になってしまいましたが、包丁だけは日本のオリジナルでアメリカやドイツの包丁とは差別化されているし日本食のブームで海外のシェフも和包丁を使うようになり、この3-4年には一般家庭にも浸透して、日本製の包丁を一度でも使うとその繊細な切れ味で他の包丁は使えないと言われるほど人気が出ています。

包丁と同様に関の伝統的なアウトドアナイフの火を消さないためにも何とかしなければならないが、もう中国と対抗しても勝てっこ

ないので、ハイテクでなくてもローテクでいいので、日本の昔ながらの手の技術を使った伝統的なナイフ、機械で作ったナイフと違って手のぬくもりと味のあるナイフを作れば、海外のユーザーやコレクターは日本製のそのようなナイフを求めているので、付加価値のあるカスタム的なナイフを少量生産して生きていく道はあると思う。

その為には、チャレンジャークラブの若者が今の内に関のベテラン職人から伝統技術を学んで継承して、それをいかに容易に手造り感のある品物に作り上げて、進化させて行くことが非常に大事だと思います。そのような場を提供するために市も尽力を尽くしてもらって是非このセキテラスにチャレンジャーや他の若者が自由に使える工房を作ってもらいたい。